

# 令和3年度特色入試問題

《文学部》

## 論文試験

A～Cの3段階評価

(注意)

1. 問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
2. 問題冊子は表紙のほかに9ページある。
3. 解答冊子は表紙のほかに4ページあり、そのうち「ます目」の部分が解答欄である。なお、別に下書き用紙4枚を配布する。
4. 試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
5. 解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
6. 解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
7. 解答冊子は、どのページも切り離してはならない。
8. 問題冊子および下書き用紙は持ち帰ること。解答冊子は持ち帰ってはならない。

問 次の二つの文章を読み、以下の問いに答えなさい。なお、解答の中では、問題文 A（英語）の筆者を A、問題文 B（日本語）の筆者を B と表記すること。

- (1) 問題文 A の筆者の主な考えをまとめなさい。(400 字以内)
- (2) 問題文 B の筆者の主な考えをまとめなさい。(400 字以内)
- (3) 人々が外的世界に美や魅力を見出す要因について、あなたはどうか、二つの文章をふまえてまとめなさい。(800 字以内)

文学部論文試験は問題文 B のみ公開する。

## 問題文 B

われわれが赤児のときに喜んで手にするガラガラのような幼児用の玩具は単純な色彩で飾られている。われわれ自身には記憶はないけれども、幼児は「傍」の掛軸などには目もくれず、好ましく美しいものとして、このような玩具を楽しむ。長ずるにつれて、童話や童謡や絵本などを楽しむが、これらのものの中にもアンデルセンや小川未明、宮沢賢治、北原白秋、山田耕筰、初山滋などという芸術的香気の高い作品もありはするが、それはむしろ例外で、子供が好む一般の童謡や絵本などは成長した後のわれわれの美的要求や、芸術的要求を満たすとは限らない。ふつうは知性の転機とも言われる思春期の前後から、芸術への開眼も生じ、深い美についての理解が始まるのではなかろうか。

こう考えてみると、美はたんに直接的な知覚や感覚のみの問題ではなく、なんらか成長するにつれて発達する知性と関係があるように思われてくる。たしかに、複雑な構成の長篇小説や単色の墨絵の美など、知性の不足している頃には無縁の存在ではなかったか。そこで、背景に秘めている教養の高まるにつれて、われわれが美と感ずる対象、つまり、われわれに美しいという知覚を呼びさます事物が変化してくるという事実を認めなければならない。

それゆえ、人々は、たんなる知覚的感覚と異なって趣味感覚が美の弁別能力である、というふうに考えるようになった。たしかに趣味は、知性や教養と関わりがあるから、それにしたがって意識される美は、単なる知覚ではないということもできよう。しかし、趣味はあくまでも感性的なものであり、個人的なものであろう。とすれば、美はやはり個人的に高級な感覚をもって趣味として把握されるものなのであろうか。それならば、「趣味については論議すべからず」という古代ローマの諺の通りに、美の論理的研究など不可能なことになってしまう。

けれども、なおよく反省してみよう。われわれは自分の好きな、自分の趣味にあった絵、たとえばユトリロの絵の複製を額に入れて書斎において楽しむということはあろう。歴史を湛えたパリの街のなにげない淋しさが、その建物の前を行く人影とともに、ある時期の私をとらえ、その絵が趣味にあったという事実はある。しかし、その当時でも、私はこれが第一級の芸術品であるとか、これが芸術美の至高のものであるというふうには断定することを差しひかえた。おのれの好きな美しさとは別に、ミケランジェロや小林古径や、ピカソの絵の持つ美を、ユトリロの作品のそれよりもはるかに高い美として認めざるをえなかった。また、たといおのれの趣味や好みに合わないものであっても、そのものの美的価値を認めることがありはしないか。

ここに、少くとも、趣味とは別に、なんらか美と深く関わりあうものがある

のではないか、という問題を出すことだけはできよう。或る作品が具体的にどういう点でどれだけの作品よりも優れているとか、いないとかということは一義的に答を出すことのできない問題であるかもしれない。しかし、少なくとも、美を感じるとる趣味や知覚と異なって、そういうものでとらえられる美とは何か別の、美を見つけ出してゆく力がどこかにあると考えることはできる。そこで、美とは何かとあらためて問い直す態度も生じ、かくて、美について真剣に思索する必要も認めざるをえないであろう。

しかし美について思索することは、はたして可能であろうか。だれでもこのように問い直すにちがいない。なぜならば、美は、日常の生活の中でごく自然に感じとられるものであり、つまり思索の対象ではなく感覚の対象であると思われるからである。このことに少しのあやまりもないと思う。なぜならば、いまし方ものべたように、われわれは景色を見て、それを美しいと考えるのではなく、直接に美しいと感ずるのであるし、美人を見て考えた上で美しい人だというような人はいないであろう。

芸術作品の場合でも、事態は多くこのようなものである。最初の旋律ないし和声を聞いた途端から、われわれはある楽曲に引き入れられるのであり、詩もそれを読むなり聞くなりして、それをよいと直感するので、普通は、いろいろと熟考した末に或る詩が好きになったり、或る楽曲に魅せられたりするというわけではあるまい。

それと同時に逆の現象もあって、たとえば展覧会などで最初の<sup>いちべつ</sup>一瞥で受けつけることができなような感じの作品に接した場合など、われわれはこれを美しいとはつゆも思わず簡単に通り過ぎてしまうことが多い。したがって、昔から美は感覚の対象、もしくは趣味判断の相関者（関わりあうもの）と考えられ、思考の対象ではないときめつけられてしまい、芸術もそれに応じて趣味や感覚の対象とされてきていた。たとえば、十七世紀半ばから、ホームやド・クルーザがすでに美を趣味や快感に結びつけていた。また、今日の「美学」という学問の英語にあたるイスセティクス (aesthetics) のもとになるラテン語はエステティカ aesthetica (感性学) であるが、この語を初めて学問の名称として使ったパウムガルテンは、「芸術の理論……美を思索する学問……としてのエステティカとは感覚的認識の学である」(『美学』序論第一節) と書いている。そして、カントも『判断力批判』で「美は趣味という能力で判断される」(序論・七) と言っている。

このように見てくると、科学が必然的な一義性を主張し、非個人的な普遍性の次元であるのに対して、芸術は人間の判断の自由な次元であると考えられ、むしろ、思索を介さない直接体験の、とらわれない自由さの中に、美や芸術の特色があるとさえ思われる。この事態を一口にいえば、そもそも美について思

索することは可能かもしれないが、その必要はあるまいということにもなってくる。

私は、いま述べた事柄の中に真実が含まれていることを、少しも拒もうとは思わない。けれども、はたしてこれで十分であろうか。本当に美は直接的な視覚、聴覚、あるいは感覚、感情の相関者であって、美について思索することは、理論的にはともかくとして実際問題としては不要なのであろうか。一つの例をとって考え直してみよう。

たとえば太宰府の遺跡に立って、大野山の起伏や筑紫野の風景を愛でる場合を考えてみよう。われわれは何を思索するまでもなく、その山野の自然の美しさに心を惹かれ、いつまでも立ち去らぬ思いに時を過すにちがいない。しかしもし、大野山の上には、八世紀のころ、山城が築かれており、太宰府の私どもの立っている足下にある台石は、昔ここに築かれた都府楼の礎石であるということをごだれかに説明してもらい、それらの事実を回顧しながら、この景色をまた改めて眺めるときに、風景は時間の立体性を得て、そこにある一木一草は自然の悠久な生命をあらわし、昔と変わらぬ面影を残しているとしても、人の営みには起伏があり、ここに移ろうた流転の影を想い浮かべるとき、しだいしだいにただの山野の風景とは趣きを異にした詩情を体験してくる。そのときにはじめて、遺跡に来て風景を見たという意味が生じてくる。もとより、詳しい知識がなくとも、ものさびた礎石を見れば、ここに古人が生活を営んだという事実はわかるであろう。しかし、正確な歴史的知識が与えられてくると、そこに建っていた堂塔のあたりを去来した人々の服装を思い描き、詠まれた歌などものばれて、いつしか風景は歴史の舞台として重みを添えてくるにちがいない。

こういうことを考えると、人間の知的な省察が加わった場合とそうでない場合とでは、単なる風景に接しての美的体験であってもその内容が違ってくることになる。私はすべての景色について、何もこのような詮索をしなければならぬと言っているのではない。ただ風景であっても、われわれが醒めた意識をもって考えたときに、たといそれが連想によるものであるとしても、ある心象風景が花を添えることがある。このようなことが、また風景から詩を作り出してゆく一つの手がかりになっていることも忘れてはなるまい。

ものの美しさに目覚めた精神が、夕焼けの富士を仰ぐときに、その麓に展開された数々の巻き狩りや、この山を詠じた詩人たちの作品などをつねに思い起こす必要はない。そのような知的なゆとりを忘れさせるほどの圧迫感をもって山がそびえ立ち、燃え輝いているということもあろう。われわれはただ単純に景色の美しさにおぼれる。これは確かなのである。しかし、この赤焼けの中に浸り、飽かず眺めている自分の心を反省してみると、無意識的にはあれ、夕空の山と競うばかりの青春の燃え立つような充実した思い出や、さらにまた、

消えゆく光とともに身にしみわたる人の世のはかなさの<sup>うれ</sup>愁いなどを、たんなる感覚とはちがって、<sup>じょうしよ</sup>情緒的に体験しているということがある。かかる情緒は、たんなる知覚とは異なって、知性的な要素が入っているものなのである。われわれはこのような回想や憂愁をかならずしも意識的に形成するのではないが、しかしそのような情緒が体験されるという事実は、そのように体験された時点で、意識化されているということにほかならず、しかも、それはしばしば過去が知的に整理されていることを前提とする。

こう見てくると、自然美の観賞とかあるいは享受という場合にも、思いのほかに人間は知性を必要としていることがわかるであろう。

(今道友信『美について』講談社、1973年より。一部省略)